

目的; 被服構成実習では作業能率の向上のためにミシン作業の働きは大きなウェイトをめている。最近ミシンもデザイン、機能の両面から改良が進み、種々のミシンが市販されている。私達はミシン作業を少しでも能率的に行い、しかも疲労感を少なくするためにはいかなる考慮をしたらいいのか、またミシン操作の仕方と作業能率にはなんらかの関係があるのかという点に疑問をもった。そこで全く異ったミシンの機種を用い、単純なミシン作業をさせ、被験者の作業時の姿勢、作業後の疲労感等について検討した。今回はそのオ一步としてミシン作業時の姿勢について報告する。

方法; 被験者は短大生(被服科2年)30名を選んだ。ミシンは直針で、糸通しが横方向からのSミシン227型と針棒が前方へ 49° 傾斜し、糸通しが正面からのSミシン680型の2種を用いた。作業内容は長さ60cm、幅6cmの天竺木綿2枚重ねにしたものをたて方向に直線縫いをさせ、ミシン操作前、糸通し、縫いはじめ、作業2分半経過後、5分後の5段階について被験者を正面、側面から同時に写真撮影をし、分析の資料とした。

結果; 1. 作業姿勢は大きく三つの型に分類することができた。I型は最も多く縫いはじめ、作業2分経過後、5分後の姿勢がほとんど変化しない。II型は作業動作が針に近い位置にある。III型は作業動作がたえお変化している。

2. ミシンの機種別では糸通しの姿勢は異なるが、作業開始から5分後までの姿勢にはあまり差異はみられない。